

親潮

第 326 号
令和 7 年度 第 2 号

OYASHIO

北水同窓会誌

2025
326
No.2

北水同窓会のEメールアドレスです

hokusuialumni@gmail.com

ホームページアドレスです

<https://hokusui.net>



特集 北水の今

北水発：最近のプレスリリース(研究発表)の概要

- 次回総会案内
- 会員の受賞
- 支部会・クラス会報告
- 寄稿
- 学位取得者
- 会員の異動
- ほか

親潮

第 326 号
令和 7 年度 第 2 号
OYASHIO

CONTENTS

同窓会定期総会案内 3

特集 北水の今

特 集

北水発：最近のプレスリリース(研究発表)の概要 4

北海道大学ホームカミングデー 2025
水産学部卒業生・在校生のつどい 9

会員の受賞 10
樋口 達夫氏(昭50食) / 多田 邦尚氏(昭63博化)

地方理事について 13

支部会・クラス会報告 14

北水、昭和40年入学同期の集い
1967年(昭和42年)水産学部入学同期同窓会
1971年 北大水産入学同期会 in 金沢・能登
北水同窓会石川県支部 令和7年度総会
昭和53年卒業特設専攻科同期会
北大ブルーグラス研究会「50周年記念式典」
北水同窓会 愛知県支部 令和7年度秋の飲食会(ジンパ)
北海道大学水産学部 旧水産化学科OB・OGの集い

寄稿 19

会員死亡通知 20

学位取得者 20

卒業生の就職先 21

会員の異動 22

親潮投稿規定・編集後記 22

親潮326

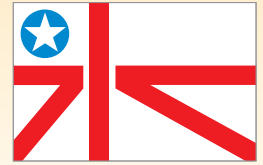
表紙写真の説明

- ①アゴハゼの稚魚
- ②2022年5月23日、道東はるか沖
172kmでのスケトウダラの
採集状況
- ③海水上にできたメルトポンド
(Steffen Graupner撮影)。
- ④メルトポンドでの観測の様子
(野村大樹撮影)





第104回(2026年) 北水同窓会 定期総会



[今年は名古屋で開催!]

開催案内

初春の息吹が感じられる季節となりました。皆様、いかがお過ごしでしょうか？
 今年は7年ぶりに、名古屋で総会を開催することになりました。
 久しく会っていない同窓と申し合わせて参加してみませんか？
 新卒者の皆様は、新しい職場の様子などの情報交換をしませんか？
 多数のOG・OBの皆様のご参加をお待ちしています。

日時 ● 2026年5月23日(土)

会場 ● ウィンクあいち 11F 中会議室1103

愛知県名古屋市中村区名駅4丁目4-38
 電話052-571-6131(受付時間:9:00~20:00)
 最寄り駅 JR名古屋駅・名鉄名古屋駅・地下鉄名古屋駅下車 徒歩5分
 新幹線口から徒歩9分
 新幹線で東京駅から:約97分、新大阪駅から:約51分

受付 ● 16:00~16:30

本部総会 ● 16:30~17:00

講演 ● 17:00~17:30

「サカナの生殖メカニズム~基礎研究と応用研究~」
 講師:長濱嘉孝氏
 (略歴/昭和41年 水産増殖学科卒、自然科学研究機構 基礎生物学研究所教授(1986)、基礎生物学研究所副所長(2004)、基礎生物学研究所特任教授(2008))

懇親会 ● 17:30~19:30

会費 ● 8,000円 会費は当日徴収させていただきます。

申し込み締め切り日 ● 4月30日(木)



お申込み先
 携帯電話、メール、郵送でお申し込みください。
 Eメール:itouhiro@kensetsukankyo.co.jp
 kyoung.ito@ezweb.ne.jp
 電話番号:080-6924-3776
 連絡先:(北水同窓会愛知県支部長 伊藤 浩)
 郵 送:〒509-7201 岐阜県恵那市大井町672-2
 北水同窓会愛知県支部 伊藤 浩 宛

郵送にてお申し込みの場合は、このページをコピーして送信用紙としてお使いください。

〈北水同窓会愛知県支部あて〉

第104回 北水同窓会 定期総会 参加申込書 (1名毎に記載願います)

下記に記入し、郵送または同じ内容をE-mailにてご連絡願います。

ふりがな	卒年度、学部学科(卒年は西暦でお願いします)	所属等(任意)
お名前(必須)	年	
ご住所(任意) 〒(-)		
電話(任意) () E-mail(必須):		
参加形式(必須、お選びください) 右記の□に✓をお願いします		
<input type="checkbox"/> 総会参加 <input type="checkbox"/> 懇親会参加		
その他伝達事項(任意)		

北水発:最近のプレスリリース(研究発表)の概要

今回の特集も、前号(325号)に引き続き、北水の教員から発信されたプレスリリースの概要を掲載いたします。北水の研究をより幅広く知っていただくために、前号にお名前のなかった先生方を中心にお声がけし、また、複数のプレスリリースをお出しになっている先生には、今回も1件を選んでいただきました。以下では、それらを掲載日順にご紹介します。詳しい内容を確認したい場合は、各記事横のQRコード先のウェブページからpdfをダウンロードして参照してください。

2024/12/25

漁業に大打撃をもたらす「貧酸素水塊」の発生予測に成功 ～北海道南部・噴火湾を例に～

【ポイント】

- ・夏季に発生する著しく酸素濃度の低い「貧酸素水塊」の発生予測に成功。
- ・直前の冬季における大気と海洋の状態から半年後の酸素状態を予測。
- ・漁業関係者にとって極めて有益な情報になることが期待。



【概要】

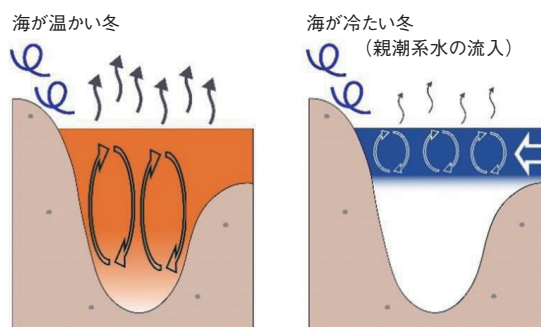
北海道大学水産学部4年の三木智尋氏(研究当時)、同大学大学院水産科学研究院の阿部泰人准教授、大西広二助教、大木淳之教授、高津哲也教授の研究グループは、ホタテガイやタラ類、カレイ類、エビ類などの水産資源が豊富な北海道南部の噴火湾(海底水深約100m)において、夏季の底層に発生し、漁業に大打撃をもたらす「貧酸素水塊」の発生予測に成功しました。

貧酸素水塊は著しく水中の酸素濃度が低い水塊(2ml/l以下)です。世界中の閉鎖性水域(湖と海を含む)で発生し、一旦これが発生すると、呼吸で酸素を必要とするカレイをはじめとした底生魚類などの海洋生物が酸欠状態に陥り、特に遊泳能力が低く貧酸素水塊から逃れるのが困難な生物は大量死に至ります。そのため、漁業関係者も貧酸素水塊には大きな関心を持っています。

この水塊は、夏季に海底近くの底層で発生し、噴火湾でも数年に一度発生します。その原因は、生物による酸素消費量に対して酸素供給量が少ないことにあります。特に夏季は、海面が日射で暖められることで水が軽くなり、水柱が安定するため、表層を介した大気からの酸素供給が制限されます。

貧酸素水塊の発生予測を試みるべく、本研究では酸素濃度の回復過程に着目しました。冬季では大気からの冷却により表層の水が重くなって沈み、海底にまで達する深い対流が生じることで、表層から底層に酸素が供給されます。本研究は、この回復の程度が年によって異なり、湾外から親潮系の冷たい水が流入する年は、大気からの冷却が抑制されるとともに、親潮系の軽い水が海面を覆うことで対流が制限され、底層の酸素濃度が十分に回復せず、続く夏季に貧酸素が発生しやすくなることを突き止めました。つまり、半年前の大気と海洋の状態から、夏季の貧酸素発生予測が可能となります。

なお、本研究成果は、2024年12月16日(月)公開のJournal of Marine Systems誌に掲載されました。



2025/5/12

北海道南方はるか沖合表層でスケトウダラの分布を発見 ～同種の沖合分布記録を大幅に広げる発見、越冬後の栄養回復のため回遊した可能性を指摘～

【ポイント】

- ・スケトウダラは大陸棚周辺海域に分布する底生魚類で重要な漁業資源。
- ・本種の分布を春季の北海道南方36km及び172km沖合の表層で確認。
- ・越冬後の栄養回復のために南下回遊により季節を先取りしていた可能性を指摘。



【概要】

北海道大学大学院水産科学研究院の山村織生准教授、松野孝助教、同大学水産学部附属練習船おしよろ丸二等航海士の大和田真紀助教(研究当時、現 附属練習船うしお丸助教)、同船長の亀井佳彦教授の研究グループは、2022年5月下旬に実施された附属練習船おしよろ丸による実習中に、北海道南方はるか沖合の2地点(図1のStn.1、Stn.2)での表層トロール網(最大採集水深33m)の操業において、合計2,999尾のスケトウダラを採集しました。さらに南側の地点(図1のStn.3)での操業では、魚類が全く採集されませんでした。

採集された地点(Stn.1、Stn.2)は北海道沿岸からそれぞれ36kmと172km離れており、海底水深はそれぞれ1,800mと5,500mでした。今回の採集は、従来の北西太平洋でのスケトウダラの沖合分布記録を大きく広げると共に、本種には稀な昼間の表層での分布の報告となります。両地点での平均体長はいず

れも39cmでしたが、南側のStn.2の方が良好な摂餌と栄養の状態を示しました。この地点は春季ブルーミングの盛期にあり、利用していた餌は主にカイアシ類でした。

これらの結果から、今回のスケトウダラは春季ブルーミングがもたらす豊富な餌を利用するため北海道沿岸から南下回遊したと推定され、その後は季節的なブルーミングの進行と共に北上するものと考えられました。北西太平洋のスケトウダラは越冬に

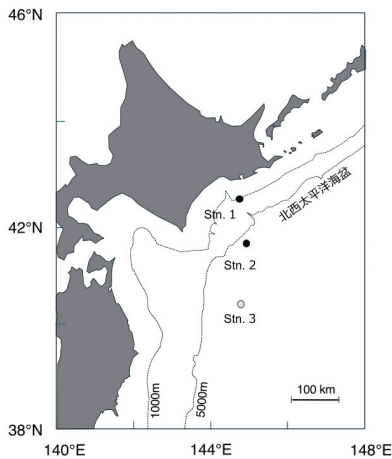


図1.おしよ丸第124次航海における採集地点。黒点で示した2地点でスケトウダラが採集された。

より低下した肥満度を5月中に急激に回復することが知られており、今回観察された沖合分布がその回復に寄与している可能性が指摘されます。

なお、本研究成果は、2025年4月18日(金)公開の魚類学国際誌Journal of Ichthyology誌にオンライン掲載されました。



2022年5月23日、道東はるか沖172kmでのスケトウダラの採集状況。

2025/5/16

アゴハゼ稚魚は他個体の行動から摂餌課題を学ぶ ～世界で2例目の単居性魚類稚魚における社会情報利用～

【ポイント】

- ・群れをつくらない「単居性」のアゴハゼ稚魚が同種の行動から新たな餌と餌場を学ぶか検証。
- ・訓練済みの個体と同じ水槽に入れたアゴハゼ稚魚は、初体験の餌と餌場を素早く学習。
- ・硬骨魚類全体で単居性稚魚における社会情報利用が見られる可能性を示唆。



【概要】

北海道大学大学院水産科学院修士課程2年の中山大佑氏(研究当時)、同大学大学院水産科学研究院の石原千晶助教、和田哲教授らの研究グループは、日本の潮間帯に多く見られるアゴハゼの稚魚が、生まれて初めて出会った「人工のフレーク餌」と「水面という餌場」について、自らの経験だけでなく、経験済みの個体を観察することによって、素早く学習することを明らかにしました。

動物は、自らの試行錯誤によって得られる独自情報と、他の個体を観察することで得られる社会情報を利用できます。生まれてからの時間が短い若齢個体は、成体と比べて自らの経験に乏しいため、社会情報を利用することのメリットが特に高いと期

待されますが、若齢個体(稚魚)の社会情報研究はグッピーのような群れ生活をおくる種で多数の検証例がある一方、アゴハゼのように群れをつくらない単居性の硬骨魚類では、過去にカレイ1種でしか報告がありませんでした。

今回、カレイ類(カレイ目)と系統的に大きく異なるアゴハゼ(ズキ目)でこの行動が発見されたことから、摂餌行動における社会情報利用が様々な単居性硬骨魚類で見られる可能性が示唆されました。

なお、本研究成果は、2025年4月28日(月)公開のEthology誌にオンライン掲載されました。



撮影：大友洋平

アゴハゼの稚魚。海では写真のように海底や基質の近くに生息し、小型の底生生物を食べている。

2025/6/27

クロソイの全雌種苗生産に初めて成功

～クロソイ養殖における出荷サイズ統一と生産効率化への貢献に期待～

【ポイント】

- ・性転換技術を用い、雌の遺伝型を持つ雄（偽雄）を作出。
- ・偽雄と通常の雌を人工授精により交配し、100%雌となる種苗個体群の作出に、世界で初めて成功。
- ・雄より雌が早く大きく育つクロソイ養殖において、出荷サイズ統一と生産効率化への貢献に期待。



【概要】

北海道大学大学院水産科学院博士後期課程のムエタ フリダガシェリ氏、山口 耀氏（現在は長崎大学所属日本学術振興会特別研究員PD）、同大学大学院水産科学研究院の平松尚志准教授、東藤 孝教授及び北海道立総合研究機構栽培水産試験場の川崎琢真研究主幹の研究グループは、クロソイ (*Sebastes schlegelii*) の全雌生産に世界で初めて成功しました。

胎生メバルの仲間のクロソイは、主に北海道をはじめ我が国の北方海域で漁獲される重要な水産資源であり、メバル類の中でも特に成長が早く、一尾の親から数万尾の稚魚を得られるこ

と、酸欠や水温・水質変化などの環境変化にも強いなどの特徴から、これまで養殖の試みも行われてきました。しかし、人工授精技術ができるまでは種苗生産が不安定であり、胎生魚であることから育種も進んでいませんでした。また、雄と雌で成長スピードが異なることから、出荷時の魚体サイズにばらつきが生じ、小型の個体を選別して育成期間を延長しなければならないなど、非効率的な生産工程がネックとなり、養殖事業が拡大しませんでした。本研究グループは、これまでクロソイ種苗を安定して生産できる独自の人工授精技術開発を進め、養殖における育種基盤を提供してきました。

本研究では、遺伝的な雌(XX型)と雄(XY型)を見分けるDNA検査と性転換技術を用い、遺伝的には雌(XX型)でありながら精巣を持ち精子を作る成熟雄(偽雄)を新たに作出しました。次にこの偽雄から精子を取り出し、通常の雌親(XX型)に人工授精を施しました。この雌親は妊娠し、半年後に産仔しました。DNA検査の結果、産仔された仔魚は全て雌(XX型)であり、さらに育成を進めた結果、100%の個体が正常な卵巣を持つ雌魚であることが確認されました。

本研究の成果は、雄より雌が早く大きく育つクロソイにおいて、全雌種苗を用いた養殖生産を可能とするものであり、出荷サイズ統一と生産工程の効率化に対する貢献が期待されます。

なお、本研究成果は、2025年6月7日(土)公開のAquaculture誌にオンライン掲載されました。



クロソイ全雌仔魚

2025/10/9

中央北極海のメルトポンドの栄養塩動態を解明

～海水栄養塩循環におけるメルトポンドの重要性を提示～

【ポイント】

- ・国際通年漂流観測「MOSAiC」計画において北極海メルトポンド観測の結果を報告。
- ・メルトポンド形成が海水の栄養塩循環に及ぼす影響を解明。
- ・将来の北極環境変動予測への貢献に期待。



【概要】

北海道大学大学院水産科学院博士後期課程1年の秋野僚太氏、同大学大学院水産科学研究院の野村大樹教授、東海大学生物学

部海洋生物科学科の野坂裕一講師、国立極地研究所の猪上一淳教授、ドイツ・アルフレッドウエゲナー極地海洋研究所などの国際共同研究グループは、2019年から2020年に行われた中央北極海での通年漂流観測「MOSAiC」計画に参画し、「メルトポンド」（海水が融けてできた水たまり）において、藻類が光合成をするのに必須な成分「栄養塩」の特性についての観測結果を発表しました。

メルトポンドは夏の北極でよく見られる現象であり、近年の温暖化によって増加が報告されています。MOSAiC計画では夏季の中央北極海にてメルトポンド観測を実施し、メルトポンドの水やその下の海水を採取し、栄養塩などの成分分析を行いました。メルトポンドの底にはメルトポンド内で生産された有機物（藻類や動物プランクトンの死骸など）が沈降しており、それを分解するバクテリアの高い活性が観測されました。メルトポンド直下の海水は、メルトポンドに面する上部がスポンジ状に

融解しており、メルトポンドの水や海水の他の部分と比較し高い栄養塩濃度が観測されました。この栄養塩はメルトポンドで生産された有機物が沈降・分解され、再生した栄養塩に由来すると考えられ、メルトポンドの形成が海水の栄養塩分布の決定要因の一つになっていることを示しました。また、メルトポンド内の水と海水下の海水との交換や、積雪融解水の流入によって栄養塩が供給される様子が観測され、この栄養塩を用い藻類が光

合成を行えば、メルトポンドが海水に栄養塩を濃縮するサイクルが形成され、海水融解時に海洋表層により多くの栄養塩を供給し海洋の藻類生産を支えるなど、海水が北極の生物・化学環境へ大きなインパクトをもたらす可能性があります。

なお、本研究成果は、2025年8月30日(土)公開のJournal of Geophysical Research: Oceans誌に掲載されました。



海氷上にできたメルトポンド(Steffen Graupner撮影)。



メルトポンドでの観測の様子(野村大樹撮影)。

2025/10/23

食用海藻スジアオノリで精密なゲノム編集技術を確立
 ~遺伝子レベルで成長や香りの仕組みを解明する新たな道を開く~

【ポイント】

- ・ 食用海藻スジアオノリで、これまで海藻類では不可能だった精密なゲノム編集を実現。
- ・ 成長や香りなどの有用形質を制御する遺伝子を直接検証できる技術基盤を確立。
- ・ 海藻の香りや風味改良、環境適応機構の解明、藻類ブルーム対策など、社会や産業に貢献可能。



【概要】

北海道大学大学院水産科学院博士後期課程の秦 政氏、同大学大学院水産科学研究所の宇治利樹准教授、水田浩之教授らの研究グループは、抗生物質耐性遺伝子を選択マーカーとして利用し、その遺伝子カセットをゲノム編集技術(CRISPR/Cas)で標的遺伝子座にノックインする手法を開発しました。この方法により、遺伝子の位置や機能を高精度に特定できるようになり、有用遺伝子の探索や機能解析が効率的に可能になります。緑藻スジアオノリは、食用として香りや味に優れる一方で、アオノリ類は条件が揃うと大規模な藻類ブルーム(大量発生)を引き起こし、漁業や観光に被害を与える二面性を持っています。アオノリの成長や香り、環境適応の分子メカニズムを理解するためには、

精密な遺伝子機能解析技術が不可欠ですが、これまで海藻類ではその技術が限られていました。

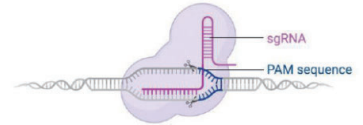
本研究では、まず抗生物質耐性を付与するaph7^r遺伝子を選択マーカーとして用い、導入遺伝子の安定的な発現を実現しました。さらに、CRISPR/Cas9技術を用いて、内因性アデニンホスホリボシルトランスフェラーゼ (APT) 遺伝子座にaph7^rカセットを正確にノックインする手法を確立し、効率的に標的遺伝子改変株を取得することに成功しました。本技術は、スジアオノリの成長や香り成分生成などに関わる遺伝子の探索を加速させるだけでなく、アオノリ類の大量発生現象の分子メカニズム解明にもつながると期待されます。

なお、本研究成果は、2025年10月6日(月)公開のBMC Plant Biology誌にオンライン掲載されました。



スジアオノリ

- 香りや味に優れる青海苔
- 藻類ブルーム(大量発生)による漁業・観光被害



ゲノム編集技術で標的遺伝子座にノックインする手法を開発

- 遺伝子の位置や機能を高精度に特定可能に
- 成長や香り成分生成などに関わる遺伝子の探索へ
- アオノリ類の大量発生現象の分子メカニズム解明へ

2025/12/15

イッカクが水中録音機器に接触することを発見

～係留系の安全性に疑問を提起～

【ポイント】

- ・イッカクが水中録音機器に接触することを発見。
- ・係留した海洋観測機器がイッカクの行動に影響。
- ・海棲哺乳類への影響を考慮した海洋観測の進展に期待。



【概要】

北海道大学北極域研究センターのポドリスキ エブゲニ准教授、国立極地研究所北極観測センターの小川萌日香特任助教、北海道大学大学院水産科学研究院の大槻真友子特任助教、長谷川浩平助教、同大学低温科学研究所・北極域研究センターの杉山慎教授らの研究グループは、イッカクが水中録音機器に接触することを発見しました。

海洋観測において、水温計など海洋観測機器を海中に固定し自動的にデータを記録する係留系という仕組みがあります。係留系に水中録音機器を取り付け、クジラなど海棲哺乳類の鳴音を記録し、分布や行動を調べることができます。本研究では、グリーンランド北西部カナック村周辺において水中録音機器を2年以上係留し、イッカクの行動生態を明らかにすることを目的に計4,000時間以上の録音を得ました。その中からイッカクが247回も録音機器に接触していることが分かりました。録音機器には、イッカクが機器にノックする音、擦り付ける音も入っていました。また、餌を捕る時に出すエコロケーションクリックスが、まるで餌に近づくように徐々に大きくなっていることも確認できました。以上の結果から、水中録音機器の係留によりイッカクの行動に影響を与えていることが明らかとなり、手法の安全性に疑問が残りました。今後、観測用の係留ロープを短くするといった係留系のデザインを工夫することにより、本研究のような影響を最小限に抑えることができると考えています。

なお、本研究成果は、2025年11月12日(水)公開のCommunications Biology誌にオンライン掲載されました。



写真左 水中録音機器。長さ53 cm、直径6 cmの機器(大槻真友子撮影)

写真中 水中録音機器を海に投入するところ(小川萌日香撮影)

写真右 調査地で先住民の伝統的な捕鯨活動によって捕獲されたイッカクのオス(大槻真友子撮影)

各種行事開催報告

北海道大学ホームカミングデー2025 水産学部卒業生・在校生のつどい

幹事長 高津 哲也(昭63ギ)



左 学内ツアー「水産科学館」見学
右 学内ツアー、フィールドスコープで練習船おしよる丸を
発見する米田義昭名誉教授

2025年9月28日(日)に、函館キャンパスで学内ツアーと懇親会を実施しました。

学内ツアーはまず、4月にリニューアルされた「水産科学館」を見学。水産科学研究院教授で、北大総合博物館水産科学館館長でもある今村 央先生に展示内容を説明していただきました。例えば水産学部の学科ごとの展示では、将来北大を受験する高校生を意識していることなどが説明されました。OGOBにとっては在学中に使った懐かしい機器の展示もあり、大変好評でした。続いて管理研究棟6階大会議室から函館近郊を眺望し、フィールドスコープで函館山や横津岳の山頂、停泊中の練習船おしよる丸を拡大して見ていただきました。

懇親会はジンギスカンパーティー。海外を含む遠方在住のOGOB、退職教員、留学生とその家族と在校生が参加しました。都木靖彰研究院長の冒頭あいさつでは、令和8年実施の北大創基150周年記念式典の計画概要が紹介され、多数の参加と寄附のお願いがあり

ました。乾杯後参加者は、肩肘張らない交流を楽しみました。現役学生達はOGOBから、就職先の情報、海外在住の実際、今はやらなくなった体育会主催の学内駅伝大会や当時の部活、講堂での卒業式、北海道ならではのアルバイトの話などを興味深く聞いていました。OGOBは在校生から、研究や就職活動の苦労話などを聞き、時代の変化が感じ取れたと感想をいただきました。最後は都ぞ弥生と水産放浪歌を斉唱し、散会しました。



懇親会「ジンギスカンパーティー」

会員の受賞



CONGRATULATIONS ON WINNING

樋口 達夫 氏(昭50食) 旭日重光章受章

半谷 いづみ(平8食)



令和7年秋、昭和50年食品学科卒業の樋口達夫先輩(現大塚製薬(株)取締役会長、大塚ホールディングス(株)取締役相談役)が旭日重光章を受章されました。

旭日重光章は、国家または公共に対して功労があった人物に贈られる勲章で、企業経営者では経済社会の発展に極めて大きく貢献した企業の最高責任者を対象としています。今回の受章は、樋口先輩の薬事分野への功労が高く評価されたものです。

同窓の先輩の受章は、北大の名声を高揚させるとともに、同窓の誉れであり、在校生や教員の皆様にとって最高の激励になることと存じます。

ここで、名誉ある受章をされた樋口先輩について、いくつかのエピソードをご紹介します。

まず、在学中の樋口先輩について、昭和46年に入学、在学中はアイスホッケー部の活動に熱心に取り

組まれ、水産学部移行後は、主将として勝つための練習メニューを練り上げ、練習場所を確保するために関係者と交渉していたと伺っております。学生の頃からすでに情熱的なリーダーであったこと、卓越したマネジメント能力を発揮されていたこと、そして何事にも熱心に取り組まれるお姿は容易に想像ができ、今と何も変わらない、私のお気に入りのエピソードです。

大学院修了後の昭和52年、大塚製薬(株)へ入社された樋口先輩は、私が存じ上げているだけでも数々の偉業を成し遂げてこられました。このうち、私にとって身近であり、よく伺っていた三つの偉業をご紹介します。

一つ目は「ニュートラシューティカルズ (Nutrition +Pharmaceuticals)」の礎です。

入社後、商品研究所で開発を担当した後、のちにカロリーメイトとなるスポーツニュートリション(栄養補助食品)の開発を担当されていた時のこと、樋口先輩はドーバー海峡で漁船に乗っていました。これはドーバー海峡を遠泳する選手に並走し、選手に栄養を摂取してもらおうことと、それをデータ化するためでした。これが現在の大塚の事業の一つ、科学的根拠に基づいた日々の健康維持に有用な商品を展開するニュートラシューティカルズ関連事業の礎となっております。

そして二つ目は「大塚のマーケティング」の礎です。

ドーバー海峡の次は、ポカリスエットの実質2代目プロダクトマネージャーです。ポカリスエットは科学的根拠に基づき開発されましたが、発売直後は味も見たくも当時としてはあまりに斬新すぎて展開に苦心しておりました。「いいモノを開発しただけでは売れない」、樋口先輩がよく口にされるこの言葉の原点ではないかと思えます。プロダクトマネージャーとして陣頭指揮をとり、がむしゃらに考え、論理的に

組み立て突き進み、ポカリスエット成功へ導きました。モノを売るのではなく、お客様をつくること、ポカリスエットが何に貢献できるのか、それを伝えること、という大塚スタイルの礎を確立しました。これがサプリメントを販売する米国ファーマバイト社の立て直しへつながっていきます。

最後の三つ目は「大塚のグローバル展開～上場」の礎です。

大塚は1970年代から海外進出しておりましたが、主戦場はアジアでの輸液やポカリスエットの展開でした。1990年代、いくつかの新薬開発品がアメリカでの上市を目指しチャレンジしていましたが、ついに「エビリファイ」という治療薬が上市し、そして大型化しました。樋口先輩がこの渦中の中心にいたことは言うまでもありません。

さらにエビリファイの成功後、すぐに次の課題である複数の治療薬による経営資源の多角化による経営安定化に導き、大塚は多角化した治療薬ポートフォリオに加え、輸液、医療機器、そしてニュートラシューティカルズの事業を持つ、世界で唯一無二のトータルヘルスケアカンパニーの立ち位置を確立しました。

上場時には、大塚のように複数事業を抱えることをコングロマリットディスカウントと揶揄されていましたが、樋口先輩が医療とニュートラシューティカルズの両輪であることの意義を繰り返し繰り返し説明し続け、やっとその価値が理解されるようになってきました。

いずれも会社の大きな転換点であり今日の事業の礎となったエピソードです。

このように、樋口先輩は、大塚グループの最高責任者として長年にわたり重責を担い、医療のみならず、食品・飲料、化学品等の幅広い分野のグローバルビジネスを牽引されました。さらに、日本製薬団体連合会副会長、東京医薬品工業協会会長も務

め、薬事分野に広く貢献されました。一方で、北大経営協議会委員も長く担い、北海道大学の運営及び学生育成に貢献し、また各同窓会要職も務め、卒業後の同窓生の活躍を今でも後押しされています。

後輩であり部下でもある私にとりましては、大きすぎる背中であります。真摯にその重責と向き合う姿、必死に会社が生き残る術を考え続け、実証していく姿、そして、いつも誰よりも努力されている姿を目の当たりにして、こちらが頑張らないという選択肢はないのです。

振り返ってみますと、「フロンティア精神」「国際性の涵養」「全人教育」「実学の重視」という北大の教育理念に通ずる考え方と行動形式が、グローバルでのマネジメントの中で大塚グループを大きく成長させました。まさに北大の教育理念が目指すところを体現した人材が樋口先輩であると敬服すると同時に、私も含め、北大生・卒業生には、樋口先輩に続く素養があると自信と勇気をいただいたように存じます。

この偉大な「大志」の後塵を拝し、私も自分なりにがむしゃらに突き進んでいきたいと考えております。樋口先輩のように、「あの時は大変だったんだ」と笑いながら振り返られることをひとつずつ積み重ねていけるよう、日々精進してまいります。

ここ数年の樋口先輩は、生き残る術を模索する対象を会社、製薬業界から次第に日本の産業全体に広げていて、その肩の荷が減るところかますます増えているようにお見受けしておりますが、これからも、樋口先輩が見据えるビジョンに向けて、ますます会社そして社会に貢献され、ご健勝でご活躍されることを心からお祈り申し上げます。

この度は誠にありがとうございました。

会員の受賞



多田 邦尚 氏(昭63博化) 第18回海洋立国推進功労者表彰 (内閣総理大臣賞) 受賞 2025年度 日本海洋学会宇田賞受賞

水田 浩之(昭61ゾ)



多田邦尚氏(昭63博化)は、「沿岸海域の環境研究と環境保全、および沿岸海洋学の普及啓発」への貢献が評価され、令和7年7月21日(月・祝)、東京国際クルーズターミナルにおいて「第18回海洋立国推進功労者表彰」(内閣総理大臣賞)を受賞されました。本表彰は、平成20年より、科学技術、水産、海事、自然環境など海洋に関する幅広い分野における普及啓発、学術・研究、産業振興等において顕著な功績を挙げた個人・団体に対して与えられる賞として設けられた制度です。国民の海洋に関する理解・関心を醸成する契機とすることを目的に制定され、毎年、国土交通省、文部科学省、農林水産省、経済産業省及び環境省が内閣府総合海洋政策推進事務局の協力を得て実施されています。

また、同氏は同年9月23日には、北大水産学部・函館キャンパスにおいて開催されました2025年度日本海洋学会秋季大会において、日本海洋学会宇田賞を受賞されました。本賞は、日本の海洋学の分野で顕著な学術

業績を挙げた研究グループのリーダー、教育・啓発や研究支援において功績があった方、海洋学の発展に大きく貢献した方に授与される賞です。

多田氏は、香川大学農学部・同大学院修士課程を修了後、昭和60年(1985年)北海道大学大学院博士後期課程に進学、当時の水産学部附属北洋水産研究施設海洋生産学部門の米田義昭先生の御指導の下、平成2年(1990年)に博士論文「海水中の溶存タンパク様物質およびアミノ酸の動態に関する研究」で水産学博士の学位を取得されました。平成2年(1990年)より、香川大学農学部勤務し、同大学の助手、講師、助教授を経て、平成14年(2002年)より教授、平成25年(2013年)からは同大学・瀬戸内圏研究センター長も務め、令和7年(2025年)3月に定年退職。在職中は、瀬戸内海をフィールドに、「沿岸海域の低次生物生産過程と生元素循環に関する研究」をテーマに、数々の研究助成金を獲得し、名古屋大学・金沢大学、瀬戸内地方の広島大学・愛媛大学、海上保安大学校等、更に大阪府・兵庫県・岡山県・香川県水産試験場などと共同研究を展開し、東部瀬戸内海の研究拠点として、瀬戸内海の環境研究をけん引されました。海洋科学の教科書「海洋科学入門」(恒星社厚生閣)を執筆(共著)、また、一般市民向けの「瀬戸内圏の干潟生物ハンドブック」(恒星社厚生閣)の出版。更に、瀬戸内海の環境に関する教材動画(瀬戸内海環境保全協会)を作成、また、高校生や一般市民に対する多くの海洋実習・講演等(日本財団 海と日本プロジェクトなど)を実施し、沿岸海洋学の啓蒙活動にもご尽力されました。以上のような実績・活動の功績が認められ、今回の海洋立国推進功労者表彰(内閣総理大臣賞)と日本海洋学会宇田賞の受賞となりました。

現在は、特定非営利活動法人・瀬戸内海研究会議理事長、香川大学・瀬戸内圏研究センター客員教授、香川大学名誉教授として、日々瀬戸内海の環境に目を向けておられており、今後ますますのご活躍を祈念いたします。

北水同窓会「地方理事」の範囲の変更と、 役員会への参加の提案

北水同窓会 幹事長 高津 哲也(昭63ギ)

【目的】

地方理事の皆様が4月開催の「役員会」へオンラインでご参加いただけるように変更し、各支部のご意見を酌みやすい環境を整備したいと思います。またこれを機会に、地方理事の定員等の改変も提案します。

1. 総会前の4月に水産学部内で開催している「役員会」に、新たに「地方理事」の皆様にご参加いただけるように変更します
2. 「地方理事ではない支部長」の皆様には今後、なるべく地方理事も兼任していただけるようお願いすることになります。その場合、すでに地方理事の方も含めて各支部で地方理事を2名とすることも可能とします
3. すでに理事が3名の札幌支部は3名もしくは4名に変更します
4. 人数が減少している地方支部で、支部統合を希望するご要望があれば、随時ご相談させていただき運用に変更いたします。変更は総会承認事項とします

一方で総会は、同窓の皆様が誰でも気軽に対面でご参加いただけることを前提として、従来通り実施いたします。

【背景】

「役員会」は毎年3～4月に学内(水産学部内)で開催されてきましたが、これまでは地方理事の皆様や支部長の皆様には広くご参加いただいております。しかしコロナ禍以降、急速にウェブ・ミーティング・ツールが普及したため、各地の皆様であっても時間と費用をあまりかけずに会議にご参加いただける時代になりました。

【現在の役員構成】

役員改選は毎年総会で議題として扱っており(例:親潮No.325、P19)、役員及び役員会は「北水同窓会会則」(同窓会名簿参照)第6条～第13条に規定されています。

会長(1名)、名誉会長(1名:水産科学研究院長)

副会長(若干名:現状2名)

代表理事(1名:現状はOGOB学内現役教員で、原則最年長者)

理事(若干名)＝学内理事(約55歳以上のOGOBで学内現役教員;

現状28名)＋学外理事(OGOBで退職教員;現状46名)

地方理事(若干名;地方支部ごとに1名;現状67名)

(会計)監事(2名;学外者＋学内教員)、幹事長(1名;学内教員)

副幹事長(1名;学内教員)

幹事(若干名)＝学内幹事(学内現役教員で運営業務を担当;現状8名)＋学外幹事(学外OGOB;現状6名若手)。

このように大変複雑ですが、多くのOGOBの皆様が役員になっていただくことで、ご助力・ご協力をいただけるように配慮された構成だと思います。なお顧問(若干名);相談役(若干名)も設定されていますが現在空席で、これらは会長職等を辞した方々を対象としたポストと思われます。

【地方理事と支部長の関係、今回の提案】

地方で本同窓会をサポートしていただいている支部幹事の皆様のうち、支部をまとめる支部長は、会則で定められた役員には含まれておらず、支部長が「地方理事」とは一致していないケースがあります。支部長はOGOBの皆様のご意見を直接集約できる方々であり、支部長が役員に加わっていただくことは、同窓会の運営上、大変有意義だと思います。今回は会則を変更しない方法として、支部長に「地方理事」にも就任いただく提案で、すでに地方理事に就任されている方々も含めて役員会にご参加いただけるようにする提案です。つきましては、以下の「申し合わせ」を作成して、総会で承認を得たいと思います。

ご検討いただきたく、よろしくごお願い申し上げます。

北水同窓会「地方理事」の範囲と選出に関する申し合わせ(案)
令和8年5月23日制定

1. 北水同窓会会則に基づく「地方理事」の範囲について、必要な事項を申し合わせる。
2. 地方理事の範囲
 - (1) 地方理事の定員は各支部1名もしくは2名とする。
 - (2) 札幌支部の地方理事は、前項によらず3名もしくは4名とする。
 - (3) 支部が分割もしくは統合された場合の地方理事の定員は柔軟に取り扱う。
3. 地方理事と支部長の関係
 - (1) 支部長は地方理事を兼務できるものとする。

付記 この申し合わせは、令和9年〇月〇日から実施する。

北水、昭和40年入学同期の集い 吉田 康祐(昭44化)



<左より>跡部進(増殖)、佐々木達(増殖)、吉田康祐(化学)、伊藤迪男(漁業)、阿部資満(漁業)、水野隆夫(遠洋)

北大水産学部昭和40年入学の同期生の集いが、2025年6月27日の午後6時より札幌北大正門前「CAFÉで御飯」にて親睦の会を実施致しました。

現在、沖縄今帰仁にお住いの、水野隆夫氏(昭和40年入学遠洋)の来札に合わせて在札5名の同期仲間が集いました。折から新緑の季節！観光シーズンでもありどこも予約がとれません。いろいろ探しあげた時、ふと気づいたのが北大正門前のカフェレストラン！他のお客様との相席となりましたが何と云っても我らの母校内にある懐かしい場所！で心の通う楽しい2時間となりました。

まず来札された水野氏から、仕事で全国を転勤し風光明媚な沖縄にたどり着き、「今帰仁」での充実した毎日、情け溢れる島の生活の日々に一同感動！まことに卒業以来の顔合わせの方も多く、一人一人から来札歓迎の挨拶と昔話に花がさきました。特に出席皆様が熱く語られたのは懐かしい函館での日々。

熱い昭和40年代、まだ連絡船もあり！松風町大門は大賑わいの頃の懐かしい思いで！「函館山」での夜景！乗船実習の楽しさ！寮、下宿生活でのたのしかった事等同期諸兄も、人生山川！酸いも甘いも乗り越えられ80歳路を迎えた今、すっかり好々爺になられ写真のように実に何とも嬉しそうな顔！顔！

締めは、他のお客様もいるので多少控えめに？「水産放浪歌」「都ぞ弥生」を静かにしかし熱い思い込め唄い健康に留意しての再会を約束し散会致しました。(次回は、本学中央ローンの真ん中で思いっきり大声で唄うと約束して――)

※最後に今回レストラン様のご理解もあり、一人一人が好きな物を注文しその場で各人払いとお酒控えてる方も楽しめる)まこと高齢者にとってリーズナブルな会のやり方もある事も知り、ささやかな集いでしたが、ご報告させていただきます。

1967年(昭和42年)水産学部入学者同窓会 山仲 春男(昭46食)

親潮(第325号)で、告知協力をお願いした同窓会を11月6日に、札幌グランドホテルで実施しました。大半の方はS46年卒ですが、留年者も含めて入学ベースで、交友関係が続いているので、入学年次ベースでの同窓会としました。卒業以降はサークル講座ベース等の集まりは有りまし

たが、学部全体での企画は今回が初めて、また加齢も考え、この会が事実上「最初で最後の同窓会」とのキャッチコピーで、数人で手分けして所在をトレース。

同窓会事務局で聞くと、住所不明者が75名、故人と成った人が25名の状況で、3カ月ぐらい掛けて参加者を募



りましたが、健康面で動くに動けない方々が想定以上に多く、当初4～50名の計画でしたが最終的な参加者は、33名となりました。卒業後54年余と言う時間の経過は余りにも長く、当日受付で名前をお聞きし、改めてお顔を眺めても、記憶を思い起こせない方が大半でした。会の冒頭に故人となった25名の冥福を祈り黙祷を終え開宴となりました。宴会の半ばになって、全員がマイクに向かって発言して貰う

時間帯に成って、最初は固かった雰囲気も、ようやく和み始めた様に感じました。

そして、最後に参加者全員で肩を組み、「都ぞ弥生」「水産放浪歌」の大熱唱でお開きと成りました。

参加者33名は、下記の通りです。

(食品—15) 力久潤子、大松澤敏一、山仲春男、伊藤博司、荒田(川村)久美子、石田俊三、林(野水)千恵子、相川育寛、上野厚ご夫妻、佐藤良一、佐々木豊實、室田信誠、土井厚、池田浩明
 (化学—6) 吉田恒、長岡正彦、山本貞夫、高築健二、高縁一仁、高橋孝三
 (増殖—5) 田岡睦哉、西川一義、中村将、阿部周一、松山恵二
 (漁業—7) 岡島義和、酒井健司、島田好彦、高山康比古、佐々木宏治、三宅利幸、梶野新

1971年 北大水産入学同期会 in 金沢・能登 上田 宏(昭50ゾ)



後列左より
 山森 厚
 廣海 十朗
 植松 光夫
 村田 秀樹
 清水 義博

前列左より
 福原 敏行
 上田 宏
 小野 秀悦

1971(昭和46)年北大水産入学同期会を、金沢在住の清水・山森君が幹事となり、2025年10月22日～24日に金沢・能登において開催しました。仕事などの都合で参加者は8名でしたが、加賀会席料亭「石亭」に集合。サッポロビールを飲み、北海道産のぶりなどをいただき、札幌・函館での思い出話と近況報告を行い、清水君が所属していた北大フォークソング研究会での“中島みゆき”さんとの思い出などで盛り上がりました。二次会は、ひがし茶屋街の「八の福」において芸妓さんとお酒と余興を楽しみました。二日目は“能登復興支援”をかねて、「能登食祭市場」で浜焼きを食べ、能登イタリアンと発酵の宿「ふらっと」に投宿。輪島

塗の食器で新旧の能登料理をいただき、ワイン・日本酒を堪能しました。三日目は金沢に戻り、「近江町市場寿し」で“のど黒入りの贅沢握り”などを楽しみ、ほろ酔い気分で「金沢21世紀美術館」を鑑賞して解散しました。

この会は、2011年に函館で「還暦前中後期会」、2013年に稚内、2015年に仙台、2017年に日光、2019年に新潟、2021年に札幌で「入学50周年記念会」、2023年に伊豆、と2年おきに開催してきました。次回は、2027年に岩手で開催する予定で、また元気に半世紀を超える楽しい旧交を温めたいと思います。

北水同窓会石川県支部 令和7年度総会を11月29日(土)に開催

池田 裕司(昭49ゾ)



左より 大目慶一(昭55ギ)、池田裕司(昭49ゾ)、中道五郎(昭39ゾ)
河崎浩(昭55化)、福間健(平24増生)

魚住前支部長の急逝にともない、後任の支部長を選出するための北水同窓会石川県支部総会を令和7年11月29日(土)に金沢市内にて開催致しました。参加者の減少

や昨今の状況もあり、一部の会員からは支部の整理(解散)を提案する声もありましたが、中道大先輩の「最後の2名になるまでは存続すべし!」との檄もあり、石川県支部の活動継続を参加者全員で確認致しました。

後任支部長には暫定的に池田裕司(昭49ゾ)が復帰し、あらたに副支部長として河崎浩(昭55化)を選任。支部事務局(連絡係)は池田が担当することとなりました。

状況は誠に厳しいですが、今回は久しぶりに若い会員である福間健君(平24増生)の参加もあり、年齢差50歳を超える中でも共通の話題で盛り上がり、将来に希望を抱かせる総会となりました。本学や同窓会を愛した魚住前支部長の想い(今回は写真参加)を継ぐためにも、最後の2名となるまで北水同窓会石川県支部の旗を守り抜きたいと思っております。

昭和53年卒業特設専攻科同期会を開催しました 河野 象威(昭53専)

025年10月25日、昭和53年卒業特設専攻科の同期会が行われました。我々の代は10名の小所帯ですので是非とも全員集まろうということで、半年前からスケジュール調整して大阪での開催となりました。卒業以来初めて会う懐かしい顔も見られ、髪の変化が著しい人もいましたが、学生時代の澁瀬とした雰囲気がよみがえりました。約3時間の楽しいひと時もあっという間に過ぎて、次回は数年後に東京開催を約束して解散しました。

前列左より 中川泰成、表 芳弘、吹野茂登
2列目左より 柳川延之、青井経史、須永 久
後列左より 河野象威、山田康次、鶴岡秀俊、加藤秀男



北大ブルーグラス研究会「50周年記念式典」 橋本 昭彦(昭53食)

1970年代一函館キャンパスではフォーク、ニューミュージック、ロックをめざす学生たちが集まり、多くの音楽クラブやサークルが誕生しました。当時の仲間は長髪とジープ、四畳半の下宿にはレコードプレーヤーとカセット録音機があり、プロの演奏を分析して深夜の喫茶店、北晨寮集会場などで歌や楽器のコード進行について熱く語り合いました。

1975年一北大ブルーグラス研究会が設立されます。私が大学に入学した年です。そこから50年、約500名のOB・OG、現役部員がクラブを愛し守り育てていってくれました。おかげで廃部することなく今も活動を続けています。

2025年一写真は11/2に行われた50周年記念式典の様子で、水産学部から2組の再結成バンドが参加しました。同時に50年間のクラブの歩みをまとめた記念誌も発行



されました。スマホやSNSのなかった昭和時代の情報はとても少なかったため、演奏会の古い写真や擦り切れたカセットのライブ録音を何度も聞きながら、部員の記憶をつなぎ合わせ当時の状況がまとめられました。ブルーグラス研究会半世紀の軌跡を後世へ残す貴重な一冊となっていくでしょう。



2025.11.2 琴似コンカリーニョ

北水同窓会 愛知県支部 令和7年度秋の飲食会(ジンパ)の開催報告

伊藤 浩(昭62水産化)



愛知県支部の特別企画(令和7年11月8日開催)報告です。愛知県支部では、春の支部総会・歓迎会に加えて、昨年度から秋の飲食会(ジンパ)を始めて、今年で2回となりました。今回は、愛知県でも名古屋鉄道の知立駅付近、鉄道の高架事業化が進む中で残された平地に頑固に営業する本格の長沼ジンギスカンの「Kamui(カ

ムイ)」での開催となりました。平らなプレート上で焼いてもよし、周辺のピットに落とし込んだ味付けでもよしの本格でした。他の支部の企画には及びませんが、8名の精鋭が集合しました。左前から山本(海生H18)、小島(水産化S61)、山口(遠漁S44)、兼崎(製造S41)、旗を挟んで、藤井(漁S42)、古屋(水産増殖S62)、石井(R4海生)、伊藤(水産化S62)です。自己紹介・飲み食べ放題、オーダーストップ後も続く無制限での団欒。そして、近くを走行する名古屋鉄道の列車音を跳ね返す、声高らかな「都ぞ弥生」・「水産放浪歌」の完全版の歌い放題の終わり知らずの会になりました。さて皆様、令和8年5月23日は、愛知県主催での全国総会で皆様をおもてなしたいと思います。名古屋に立ち寄っての参加を是非ともお待ちしております。

北海道大学水産学部 旧水産化学科OB・OGの集い

乙坂 重嘉(平8化)



2025年9月25日、水産科学未来人材育成館1階ホールにて、北海道大学水産学部 旧北洋水産研究施設生産学部門・旧海洋化学講座・旧分析化学講座の合同OB・OGの集いが開催されました。この集いは、9月21日から25日にかけて行われた日本海洋学会秋季大会に参加するために函館キャンパスに来場したOB・OGの皆さんと、各研究室をご退職された先生方が一堂に会し、旧交を温める会として企画されました。当日は、秋季大会を終えたOB・OGの他に、函館周辺でご活躍のOB・OGの皆さん、旧水産化学科の現役教員の先生方を加え、計34名が参加しました。

13時30分からの昼の部では、元教員の米田義昭先生、乗木新一郎先生、梁田満先生、久万健志先生、渡邊修一先生、工藤勲先生からスピーチをいただきました。内容は現役時代の思い出、ご退職後の生活、最近の研究について感じる事、など多岐にわたりましたが、ご退職後のブランクを感じさせない、聞き手を惹きつけるお話の連続でした。学生時代に戻って(学生時代より真剣に?)先生方のお話を傾聴しているうちに、瞬間に夕方を迎えました。

18時からの夜の部は、会場を「ベルクラシック函館」(函館市梁川町)に移し、会食形式での懇親会を行いま

した。会場にはプレゼンテーション用の大型スクリーンが用意され、参加者がそれぞれ準備した資料を投影しながら、順に近況報告を行い、時には先生方からのコメントが寄せられる「気の抜けない」会でした。途中、米田先生がご自宅で保管されていた1970年代の海洋観測の様子を記録した映像(8mmフィルムをデジタル化したもの)が、先生の解説とともに映写され、懐古とともに海洋学の進歩を感じる企画も用意されました。予約していた時間をほぼいっぱい使って全員が近況報告を終え、植松光夫さん(昭50化)の合図による一本締めでお開きとなりました。

北海道大学水産学部 旧水産化学科は、その設立から数えて2025年で60年を迎えており、今回合同イベントを開催した3講座のいずれも、様々な関連分野をリードするOB・OGを輩出しています。それぞれ立場は異なりますが、どの方も、学生時代を過ごした函館で、久々に会う先生や友人とお酒を飲んで、気持ちを新たにしたい一日となったことと思います。この集いのご準備をいただいた今井圭理さん(平4化)、西岡純さん(平5化)、芳村毅さん(平8化)、澤田光希さん(平22海生)に感謝申し上げます。

寄稿

JICAブルーエコノミー研修での
北大水産学部の訪問

飯沼 光生(平元ゾ)

3年前からJICA横浜センターが実施している、課題別研修「水産を核としたブルーエコノミーのための持続可能な小規模漁業」のコースリーダーを担当しています。すでに22年間に亘り、JICAが実施する様々な水産研修の企画や運営に

取り組んできました。今回の研修では「ブルーエコノミー」と「小規模漁業」という2つの開発テーマを掲げており、講義、視察、実習を通じて、JICA研修員には日本の水産資源管理、漁業協同組合、水産物バリューチェーン、漁村振興などを学びながら、自国の水産開発で活用できるヒントを見つけてもらいます。そして様々な研修の学びを活かして、帰国後に研修員が職場の漁業省・局で提案する、または実際に取り組む、ブルーエコノミー振興や小規模漁業振興のプロジェクト案(アクションプラン)を取りまとめます。毎年、アジア、アフリカ、大洋州、中南米から6~8名の水産行政官や研究員をJICA研修員として受け入れています。研修員は横浜を中心に1ヶ月ほど日本に滞在します。

この研修のもう一つの特徴として、農業水産分野の高度人材育成を目的としたJICA奨学プログラム「アグリネット」との連携があります。研修日程にはJICA研修員が希望する水産系大学で学ぶ、1週間の「大学プログラム」が組み込まれています。この大学プログラムを通じて、実際の大学の修学状況や研究内容などを知り、さらに関心のある研究テーマについて大学教官と意見交換して、今後のアグリネットの申請に向けた研究計画案を取りまとめます。北大水産学部には、2022年、23年、25年の3年に亘り、JICA研修員を受け入れて頂き、7カ国8名の研修員が函館を訪れています。今年はモルディブ研修員のサラさんとカーボベルデ研修員のマリアさんの2名を引率して、7月14日から18日の5日間、水産学部を訪れました。

北大のプログラムの実施では、水産増殖学科の先輩である都木靖彰科学院長を始め、資源生物学講座の松石



隆教授、海洋共生学講座のバウア・ジョン准教授、国際教育室の東条斉興助教には大変お世話になっています。特に松石先生や東条先生のご尽力で、函館キャンパスの案内、様々な研究講座の紹介、学生ゼミの参加などの学部内のプログラムと、

函館市国際水産・海洋総合研究センター、函館水産物地方卸売市場、水産加工会社の布目などの学外視察を合わせて、JICA研修員が多様な学びができるように工夫して頂いています。さらに大学教官とのコンサルテーションだけでなく、大学院生や留学生と話し合いながら、JICA研修員が研究計画書を取りまとめるようにご配慮して頂いています。また、学部同期になるうしお丸船長の坂岡桂一郎君と海洋資源科学講座の大西広二君、プランクトン講座の後輩の山口篤君などにも、急な訪問や対応などにご協力を頂き、感謝です。

マレーシア・ボルネオ島での3年間の青年海外協力隊の活動を終えて、ハワイ大学大学院の修学準備で、卒業5年後の1994年に一度、函館に訪れました。当時の学部長で恩師の山内皓平先生に大学院への推薦状をお願いしたり、講座の恩師の志賀直信先生に成績証明書の英訳をお願いしたりと、本当にお世話になりました。無事にハワイ大を修了した後は、JICA関係の仕事で多忙になり、20年近くも函館に戻る機会を失っていました。この研修で改めて母校に係われるようになり、とても嬉しく思います。長年ご無沙汰していたにもかかわらず、北晨寮で苦楽を共にした、坂岡君ならびに、函館水産高校の宮崎永司君と山本洋一君、函館市役所の清藤一実君などの函館組の面々に暖かく迎えて頂いたのもとても嬉しかったです。

この研修はしばらく続く予定ですので、来年からもJICA研修員を連れて函館に訪れたいと思います。引き続き水産学部や函館の関係者にはお世話になります！

※名簿調査ハガキでのご連絡分はまだ反映されていません。

会員死亡通知

岡本 榮二	(昭23セ)	令和7年12月 4日	ご家族様より
深滝 弘	(昭23ゾ)	令和7年11月 2日	ご家族様より
志田昭八郎	(昭24ギ)	令和7年 7月18日	ご家族様より
野畑 順二	(昭24セ)	令和7年 8月 2日	ご家族様より
高杉 新弥	(昭25ゾ)	令和7年 6月	ご家族様より
大原 正澄	(昭29エ)	令和7年10月 2日	ご家族様より
佐々木宏司	(昭29セ)	令和7年 7月23日	ご家族様より
中村 篤也	(昭31ゾ)	令和7年 6月14日	ご家族様より
増田 清岩	(昭32セ)	令和7年 9月 2日	ご家族様より
小出欽一郎	(昭35セ)	令和7年 9月 3日	ご家族様より
矢島 哲雄	(昭37ギ)	令和7年 6月14日	ご家族様より
岩田 守正	(昭40ギ)	不 明	
紺野 進	(昭40ギ)	令和7年 8月	三谷 勇(昭40ギ)様より
長土居 聰	(昭40セ)	令和7年12月 8日	金曾 裕一(昭40セ)様より
菊田 政行	(昭41エ)	令和6年 9月	ご家族様より
中田 宣昭	(昭42エ)	令和4年 8月12日	ご家族様より
水上 等	(昭46ギ)	令和7年 7月 7日	ご家族様より
津村 憲	(昭47ゾ)	令和7年10月 5日	ご家族様より
土谷 俊一	(昭48ギ)	令和7年 7月 1日	ご家族様より
伊澤 敏穂	(昭52ゾ)	令和7年 4月 5日	伊藤 雅道(昭52ゾ)様より
桜井 清	(昭54ギ)	令和7年12月28日	ご家族様より
小林 恵	(昭56食)	令和5年12月 9日	伊藤真理子(昭56化)様より
廣松 哲生	(昭56食)	令和7年 6月30日	川合 祐史(昭55食)様より

お詫び

親潮324号に掲載された後藤晃先生の追悼文において、濱田啓吉教授のお名前を誤って「濱田敬吉」と表記いたしました。謹んで訂正し、お詫び申し上げます。

(酒井治己)

□学位取得者【令和7年度3月取得】

西尾 燦吾	スケトウダラ稚魚の捕食者としてのソウハチの生理・生態学的研究
小幡 光汰	Comparative morphology and phylogenetic relationships of the family Samaridae and related taxa (Teleostei: Pleuronectiformes) (ペロガレイ科(真骨下綱:カレイ目)とその近縁群の比較形態学および系統類縁関係)
戸澤 愛美	Quantitative assessment of factors contributing to variations in sea surface $p\text{CO}_2$ in the polar oceans (極域海洋における海洋表面二酸化炭素分圧の季節変化の定量評価)
高 赫	Role of follicle-stimulating hormone in gonadal sex differentiation in Nile tilapia, <i>Oreochromis niloticus</i> (ナイルティラピア性分化における濾胞刺激ホルモンの役割に関する研究)

□学位取得者【令和7年度9月取得】

馬 銳	Locating productive sea areas using seabird foraging aggregations (海鳥採餌群を用いた高生産性海域の特定)
岸本 真琴	Population genetics and dynamics of the giant Pacific octopus (<i>Enteroctopus dofleini</i>) in the North Pacific (北太平洋におけるミズダコ [<i>Enteroctopus dofleini</i>] の集団遺伝学と個体群動態に関する研究)
古庄 誠	Homology assessment of luminous organs in the family Myctophidae (Teleostei: Myctophiformes) based on innervation (神経支配に基づくハダカイワシ科魚類の発光器の相同性の検証)
RURA Chalvin Putra	COD (Chemical Oxygen Demand) Across Japan's Coastline: A Study of Spatiotemporal Trend and Environmental Drivers (日本の沿岸域におけるCOD (化学的酸素要求量) : 時空間変化と環境要因に関する研究)
CHELEWANI Apatsha Pearson	Study on Cryopreservation Protocols for Efficient and Scalable in vitro Germplasm Storage in Masu Salmon, Rainbow Trout and Dojo Loach (サクラマス、ニジマス、ドジョウにおける効率的かつ拡張性を有する in vitro 遺伝資源保存のための凍結保存法に関する研究)

□令和6年度 修了者(博士・修士)・卒業者(学部)の就職先一覧

博士

国立研究開発法人水産研究・教育機構北海道区研究所釧路庁舎
Shenzhen Institutes of Advanced Technology Chinese Academy of Sciences (中国)
京都大学フィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所/大学共同利用機関法人情報システム研究機構国立極地研究所
株式会社ニッスイ

修士

経済産業省/環境省/農林水産省水産庁/北海道/兵庫県/函館市/一般財団法人材料科学技術振興財団
地方独立行政法人北海道総合研究機構/国立研究開発法人水産研究・教育機構/株式会社ニッポン
株式会社ヨドバシカメラマルチメディア札幌/名古屋工業株式会社/株式会社未来ロボット/株式会社極洋/株式会社ニチレイ
株式会社NTTデータ/株式会社イチケン/北海道電力株式会社/株式会社バンク・オブ・イノベーション/株式会社資生堂
株式会社ビックツリーテクノロジー&コンサルティング/信越有機硅国際貿易(上海)有限公司/株式会社上組/ミネベアミツミ株式会社
東京電力ホールディングス/ムトーアイテックス株式会社/株式会社スタッフサービスエンジニアリング/株式会社ゴトー養殖研究所
株式会社陽進堂ホールディングス/MDPI(Multidisciplinary Digital Publishing Institute)/農林中央金庫/トヨタ自動車株式会社
AGC株式会社/NDK SAW devices株式会社/Solize株式会社/ジャパン マリンユナイテッド株式会社
中部電力パワーグリッド株式会社/ニチモウ株式会社/今治造船株式会社/住友商事株式会社/株式会社セブテーニホールディングス
日本テトラパック株式会社/花王株式会社/株式会社リンクアンドモチベーション/サントリーホールディング株式会社
関西電力株式会社/株式会社講談社/株式会社三菱商事ライフサイエンス/株式会社アルビオン
東洋水産株式会社/伊藤ハム株式会社/三菱重工業株式会社/雪印メグミルク株式会社/キッコーマン株式会社
株式会社アルファ水工コンサルタンツ/Float meal株式会社/株式会社キットアライブ/西日本旅客鉄道株式会社
キリンホールディングス株式会社/株式会社湖池屋/Centre Testing International Group Co., Ltd. (中国)/富士電機株式会社
四国電力株式会社/プリマハム株式会社/株式会社セノン/マルハニチロ株式会社/株式会社ヤクルト本社/王子木材緑化株式会社
YKK株式会社/シコー株式会社/株式会社NTTドコモ/日清オイリオ株式会社/日本農産工業株式会社/株式会社まいばすけっと
株式会社ミルボン/セイコーエプソン株式会社/株式会社朝日新聞社/株式会社ロッテ/ミヤリサン製薬株式会社/TOPPAN株式会社
株式会社大和総研/東洋冷蔵株式会社

学部

農林水産省水産庁/農林水産省北海道農政事務所/大阪府/福岡県/国立研究開発法人水産研究・教育機構/株式会社ウェザーマップ
DBJデジタルソリューションズ株式会社/よつ葉乳業株式会社/株式会社LiB/東芝システムテクノロジー株式会社/株式会社PLAN-B
日本漁船保険組合/レバレジーズ株式会社/株式会社大水/かんぽ生命保険/旭化成株式会社/麵屋真打
日研トータルソーシング株式会社/東海旅客鉄道株式会社/株式会社レイヤーズ・コンサルティング/株式会社サンバルクス
株式会社島精機製作所/株式会社北海道農業建設コンサルタント/日清オイリオグループ株式会社/農林中央金庫
ニトリホールディングス株式会社/北海道電力株式会社/株式会社ジェイ・エス・ビー/アイリスオーヤマ株式会社

□会員異動

○令和7年4月1日付 採用

清水 宗敬 北方生物圏フィールド科学センター教授を大学院水産科学研究院教授に採用
野村 大樹 北方生物圏フィールド科学センター准教授を大学院水産科学研究院教授に採用
井尻 成保 大学院水産科学研究院准教授を同教授に採用
宇治 利樹 大学院水産科学研究院助教を同准教授に採用
小林 彰子 大学院水産科学研究院准教授に採用
五味伸太郎 大学院水産科学研究院助教に採用

○令和7年11月1日付 採用

西川はつみ 大学院水産科学研究院准教授に採用

○令和7年12月1日付 採用

浦 和寛 大学院水産科学研究院准教授を同教授に採用

○令和8年1月1日付 採用

佐々木貴文 大学院水産科学研究院准教授を同教授に採用

親潮投稿規定

【寄稿、支部・会員便り、会員の受賞、ご案内など】

一つの投稿につきA4版・1ページ(2000字程度)までとする。この制限以上の長文あるいは連載を希望される場合は2号分までとする。写真を入れる場合、その分の文字数が減る。また写真はホームページに掲載することもできる。原稿は、同窓会宛に封書で郵送するか、同窓会のメール宛に送付することとする。

【同窓生の声】

各種活動や出版物の告知・紹介、本誌への感想など。個人的な連絡は対象とせず、1記事につき300字以内。同窓会あてのメール(hokusuialumni@gmail.com)にて受け付けます。写真は入れられません。

【編集後記】

今回の編集を担当した石原と申します。私は実は北大水産学部が現在の4学科体制(海洋生物科学科・海洋資源科学科・増殖生命科学科・資源機能科学科)になった際の、最初の学生の一人です。およそ25年を経て、これまで拝読する立場だった「親潮」の編集を担当することになりました。親潮、そして北大同窓会とのご縁を感じております。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

さて、次号「親潮」令和8年度1号(通算327号)の原稿締め切りは**2026年6月10日**とさせていただきます。通常よりも1か月ほど締め切りが早まっておりますので、ご希望の方はご注意くださいと幸いです。寄稿につきましては、郵送もしくは電子メール(hokusuialumni@gmail.com)にて受け付けております。その他、支部報告や同期会報告、著者の紹介など、多くの原稿をご投稿下さいますようお願い申し上げます。なお、親潮では同窓の方々の交流形態として「同窓生の声」の広場を設けております。また、本誌に対するご意見やご感想なども募集しております。詳しくは投稿規定をご参照ください。

また、支部総会や同期会の開催時の写真や開催案内を北水同窓会のホームページ(<https://Hokusui.net/>)にて掲載しておりますので、是非ご覧ください。

編集幹事/石原千晶(平21海生)

令和8年3月発行

北水同窓会

〒041-8611 函館市港町3-1-1

TEL & FAX.0138-42-3681

E-mail:hokusuialumni@gmail.com

相続 離婚 債務整理 交通事故 労働問題 会社顧問

相談料は全て無料です

吉原法律事務所

札幌弁護士会 弁護士 吉原美智世 (昭和48年増殖学科卒業)

お気軽にお問い合わせ下さい

TEL 622-7963 FAX 622-8414

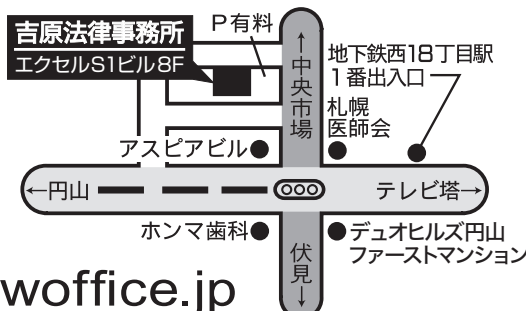
札幌市中央区大通西20丁目2-20
(エクセルS1ビル8F)

交通

東西線西18丁目地下鉄1番出口

E-mail

lawyer@yoshihara-lawoffice.jp



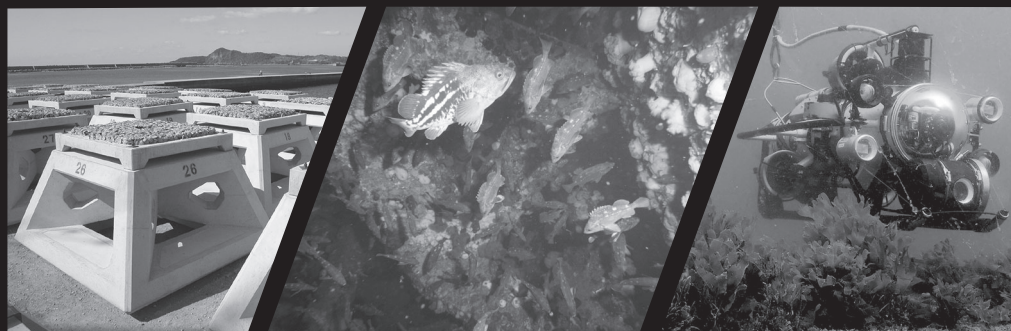
営業時間においでになれない方はご相談下さい。

人工魚礁を通じて 水産資源の保護・増殖に貢献します

海洋土木株式会社

〒142-0043
東京都品川区二葉 2-11-5

代表取締役 吹原正彦
専務取締役 生田 泰 (H 1キ)
相談役 幡宮輝雄 (S 57キ)
青森営業所長 山口伸治 (S 49化)



カルベース付き FP1.5G

北海道 積丹 シマソイ・エソメバル

水中調査を行う ROV

玉能竹田

モンドセレクション
2025年度 優秀品質金賞受賞



数の子松前

数の子を一本まるごと使用し、真昆布、がごめ昆布、
するめと合わせ、当社独自の醤油ダレで漬け込みました。



伝統の味を真心込めてお届けしています。



株式会社 竹田食品

本社・工場/北海道函館市浅野町3番10号 営業所/札幌・東京・大阪・福岡
TEL(0138) 43-1110
FAX(0138) 43-1113
<https://takeda.hakodate.jp/>

魚に感謝したい。

魚の価値を真剣に見極め、求められる人に求められる形で届けていく。
魚を大事にする思いがあれば、水産業は、まだまだ、世の中に貢献していける。
釣八は、海と人が共存できる水産業を目指しています。



株式会社釣八 代表取締役会長 釣見泰之(昭59漁)

【水産学部卒業社員】

水井 修(昭58漁) 太田 松太郎(昭59漁) 橋本 浩典(昭59漁) 倉部 徹(昭60漁) 土井 倫行(昭60漁)

本社

〒104-0042 東京都中央区入船一丁目2番1号 PMO八丁堀IV8F
TEL:03-3297-8883 FAX:03-3297-8885

支社

八戸支店(青森県) 銚子支店(千葉県) 大阪支店(大阪府) 福岡支店(福岡県)

関連会社

(株)釣十(豊洲/マグロ仲卸) (株)いかめし阿部商店 札幌蟹販株式会社
フィッシング8(ロサンゼルス) 大連釣八(中国/水産加工)

外国人人材を あなたの会社にご紹介します。

(株)グローバルスタッフィングは、ミャンマーの教育・送り出し機関である
アンダマンエイト社と共に、優秀な海外人材を募集・教育し、ご紹介しています。
水産・食品業界を熟知した私たちが、最適なマッチングをお約束いたします。



Global*
Staffing

株式会社グローバルスタッフィング(釣八グループ:人材支援機関)

代表取締役社長 釣見泰之(昭59漁) 取締役副社長 橋本浩典(昭59漁)

本社

〒104-0042 東京都中央区入船一丁目2番1号 PMO八丁堀IV8F
TEL:03-6228-3078 FAX:03-6228-3578



アンダマンエイトAndamanEight Co.,Ltd(釣八グループ:人材送り出し機関)

No.55A, Khayayyeikthar St,Mingalardon Garden City, Mingalardon,Yangon

